といへり。同じ流れの文學なる古事談五、神社佛寺事に大師の根本中堂を創立するに當りて、牡蠣の殼を多く出だせりとの事見ゆるは吾人の同條に引用せるが如し(九七頁參照)。

同じく建長の頃の物語集なる古今著聞集は、橘成季の編めるところなるが、其卷二(釋教)に又前の今昔物語と同じく宇佐八幡の賜へりし紫の袈裟と衣との事を叙して「件の御衣等、今に叡山根本中堂の經藏にあり。鳥羽院臨幸の時も御拜見ありけり。後白河院御幸のときも、拜せさせ給ひけるとなむ」といへり。

後白河法皇の撰ばせ給ひし梁塵祕抄には是より先き當時流布の郢曲の中に大師の事に及びしものあり。

大師の住所はどこ〳〵ぞ傳教慈覺はひえのやま、よかは(横川)のみめう(御廟即ち慈慧)とか、智證大師は三井寺にな、弘法大師は高野のをやまにまだおはします(僧哥十三首の內)

佛法よ文殊とかたもんまからてんわうきう傳教大師しかくくるゑん如來

(雜八十六首の內)

次いで後鳥羽天皇の御世に中山內大臣忠親の編述せし水鏡には、大師の傳に關する記事を多く收む。其中寶龜九年の事を述べたる後「ことしとぞおぼえ侍る、傳教大師大安寺にまうでゝ、行表といふ僧の弟子となりて、始めて法師になり給ひしは」云々といへるを始めとして根本中堂創建の事、渡海入唐の事、慈覺大師の登山の時より入滅に至るまでの事等あり。同じく歷史文學の一たる慈圓の愚管抄(三)には「延曆年中ニ傳教弘法ト申聖大師唐ニワタリ、天台宗トイフ無二無三一代教主尺迦如來ノ出世ノ御本懷ト至極無雙ノ教門眞言宗トヲ、コノ二人大師ワタシタマイテ、兩人灌頂道場ヲ、コシ、天台宗菩薩戒ヲヒロメ、後七日ノ法ヲ眞言院トテ大內ニタテ、ハジメナドセラレタルシルニテヒトヘニ侍ナリ」と兩大師の事蹟を併叙せり。

北畠親房の神皇正統記にも大師の事散見す。「この天皇(桓武)大に佛法をあがめ給ふ。延曆二十三年傳教弘法勅を受けて、唐へ渡り給ふ。その時則ち唐朝へ使を遣さる。大使は參議左大辨兼越前守藤原葛野麿の朝臣なり

傳教は天台の道邃和尚にあひて、その宗をきはめて同じき二十四年大使と共に歸朝せらる。

「傳教弘法兩大師、唐より傳へ給ひし天台眞言の兩宗も、この御代(嵯峨天皇)よりこそ弘まり侍りけれ。この兩師、たゞなる人におはせず、傳教入唐以前より、比叡山を開きて練行せられけり。今の根本中堂の地を開かれけるに八の舌ある鑰をもとめ出で、唐迄持たれけり。天台山に登りて智者大師六代の正統道邃和尚に謁して、其宗をならはれしに、かの山に智者大師歸寂よりこのかた、鑰を失ひて開かざる一の藏ありき。試にこの鑰にてあけらるゝに、どゞこほらず、一山こぞりて渇仰しけり。仍りて一宗の奥義殘る所なく傳へられたりとぞ。」其他根本中堂止觀院、戒壇建立の事など詳しく見ゆ。

更に我戰記文學の双璧たる平家物語と太平記とを檢せんに、こゝにも亦大師に關する記事あり。先づ平家物語の文を擧げんに、卷二座主(明雲)流の事の中に「我朝のひえいざんは、平安城より鬼門也、傳教慈覺智證大師の御こゝは申に及ばず、義眞和尚より此かた五十五代いまだ天台座主流罪の例を聞かず」といひ「我山は是れ日本無雙の靈地、ちんご國家の道場なりといひ、我朝の明雲僧正は兩宗の法燈をかゝげて、一朝の護持を致す、遠くは釋迦大日の教法を學び、近くは傳教、慈覺の餘流をくむ」といへり(長門本に據る)。

太平記(十八)には比叡山開闢之事なる條あり「風カニ比叡山ノ草創ノ事ヲ聞クニ、時ハ延曆ノ末ノ年ニ當リ、君ハ桓武ノ治天ニ始マレリ」といふに筆を起して、先の古事談に見ゆる說話を敷演して大宮權現より釋迦に及び「然レ共、此地大日遍照ノ本國トシテ、佛法東漸ノ靈たるへけれハ、何レノ所ニカ應化利生ノ門ヲ開クベキト、かなたこなたヲ遍歷し給フ處ニ、比エイ山ノふもと往々名み也しかのうらの邊りニ釣ヲ垂レて坐ス老翁アリ、釋尊向ッテ之レニ翁若シ此地ノ主シたらハ、此山ヲ我レニ與ヘヨ、結界ノ地トシテ佛法ヲ弘メントの給ひけれハ、此翁答へて申さく、我レ人壽六千歲ノ始メより、此所の主トシテ七度迄桑原ニ變せしヲ見たる也」と白鬚明神の緣起を述べ「千八百年ヲへて後、尺尊傳教大師トならせ給ヒて、延曆二十二年ニ傳教大師始メて求法ノ爲ニ漢ゼニわたり給フ、則チ顯密戒ノ三學淵底ニ玉ヲ拾ヒて同キ

二十四年ニ吾朝にかへり給フ、爰ニ桓武皇帝法ノ檀度とならせ給ヒて、此比エイ山ヲ草創せらるゝ始メ傳教大師勅ヲ承ケて根本中堂をたてんとて地ヲひかれけるに、紅蓮ノ如クなる人の舌一ツ、土ノ底ニ有ツて、法華經をくじゆスル事ヤマズ」(神田本に據る)とありて、神皇正統記の八舌の鑰とあるをこれには紅蓮の如くなる人の舌とせり。太平記の異本には、山王七社の本地垂跡の事を其次下に詳叙するを見る。

平治物語にも叡山物語の事なる條ありて、大師の傳記に關するもの一二見えたり。

凡そ延暦寺は大師最初の伽藍なり。大講堂は深草(仁明)天皇の御願、延命院四王院は文德朱雀の御願なり。法華堂には大師三代の御經もおはします。五台山の香の火、清凉山のつちも御座あり。前唐院には大師の御脇息もあり御香爐もあり、御影もおはします。其外弘仁三年の春大師九州宇佐宮に詣でゝ、法華の眞文を講じ給ひしかば、大菩薩自ら齋殿を開き、手づから大師に授け給ひし紫の袈裟には光明赫奕として

八幡三所もおはしますなり。

此他南北朝より室町時代に互りて文學の分野に於て注意すべきものゝ一は、大江山繪詞にして、御伽草子に酒顚童子として收むるものこれなり。大江山繪詞は香取大宮司家の舊藏本にして現に松浦伯爵家に傳ふるもの、最も古く考古畫譜には「繪やう鎌倉季世の風あり、恐らくはこの頃のものか」といへるも、其大和繪式なる畫風及び書體等より推して、凡そ南北朝時代のものと推定せらる。上下二卷に分たる。今御伽草子に據りて其本文を擧ぐれば、

童子あまりのうれしさにゑひほれ申しけるやうは、それがしが古をかたりて聞かせ申すべし、本國は越後の者やま寺そだちのちごなりしが、法師の妬あるにより數多の法師をさし殺し、その夜に比叡の山につき、我がすむ山ぞと思ひしに傳教といふ法師、佛たちをかたらひて、わがたつ杣とて追ひ出だす、力及ばず山を出で、又此みねに住みしとき、弘法大師といふえせもの封じてこゝをも追ひいだせば力およばぬ處に、今は

さやうの法師もなし、かやうの山にに(入定)ふぢやうす、今又こゝに立ち歸り何の子細も候はず。

とありて、謠曲大江山(古名酒呑童子)に見えたると同一系統に屬す。大江山繪詞も亦其取材を一にすべし。大江山の曲のシテなる酒呑童子は「我比叡の山を重代の住家とし、年月を送りしに、大師坊と云ふえせ人、嶺には根本中堂を建て、麓に七社の靈神をいはひし無念さに、一夜に三十餘丈の楠となつて、奇瑞を見せし處に、大師坊一首の歌に、阿耨多羅三貌三菩提の佛たち、我たつ杣に冥加あらせ給へとありしかば、佛たちも大師坊にかたらはされ、出でよ〳〵と責め給へば力なくして重代の比叡の山を出でしなり」といひて、大師の法力を語り、同じく兼平の曲にもシテの舟人は「それ我山は、王城の鬼門を守り、惡魔を拂ふのみならず、一佛乘の嶺と申すは、傳へ聞く鷲の御山を象れり、又天台山と號するは、震旦の四明の洞をうつせり。傳教大師桓武天皇と御心を一つにして、延曆年中の御草創、我立つ杣と詠じ給ひし、根本中堂の山上まで、殘りなく、見えて候」といひて山門の經營が君臣の協力に成れるを說く、大江山、兼平の二曲共に世阿彌の作にして、室町時代初期の文學的產物なり。なほ末の百番の一なる大黑の曲には、大師をワキに出だして、比叡山大黑天の緣起を述べ、其靈驗の揭焉なることを稱ふ。

大師の說話の國文に見れしものもとより未だ涉獵し盡くせるにはあらざるも、聊か以て各時代の國民の心に宿れる大師の面影を窺ふ資料に備へんとするのみ。

第三十三章　新興宗派に及ぼせる大師の影響

一　念佛信仰の發展

「此御時(後白河天皇)一天下皆以『法華經爲』旨、不『翫』之輩更人而非人」(讀經口傳明鏡集)といはれし程、法華經讀みの盛行したりし世に、新宗派の勃興すべき機運は刻々に回轉しつゝありしなり。而かも其牛耳を取り若しくは立宗の開祖となりし諸大德の一たびは皆比叡の山に登りて天台の學生となり大師の餘音に接せしことあるを見るは、千歲の下、人をして大師の遺芳餘烈

を讃仰して已まざらしむ。故に吾人は次下に於て少しくこれらの諸祖に及べる大師の影響を考察せん。

大師に依りて傳へられし天台宗は、慈覺、智證、安然等を經て、日本天台を大成すると共に、常行三昧彌陀念佛の法も亦次第に發達して實行的修行の方法として闕くべからざるものとなり、遂に良忍、法然、親鸞に至りて其完成を見るに至れり。

大師の遺志を繼ぎて叡山佛敎の大成に盡瘁せしは實に慈覺大師なりき。慈覺は啻に大師より常行三昧の法を受けしのみならず、自ら入唐して五台山に遊び、彌陀念佛の法を相承し、且つ聲明業を將來して比叡山に常行三昧堂を創め、親しく西方を願求すると共に、又人を勸めて盛んに修行せしめたり。慈覺大師自行要略記に「無始以來無量罪、今世所犯極重罪、日々夜々所作罪、念々步々所起罪、念佛威力皆消滅、命終決定生極樂」といへるは卽ち其念佛に對する告白にしてこれより念佛の法益盛んに修行せられたり。

斯くて始められし叡山淨土念佛は次第に理論の境を脫して實行の域に進み、慈慧、良源、慧心、空也等を輩出して、叡山念佛の最盛期を現出せんとするに至れり。而してこれら多くの念佛者中には、單に自己の爲めにするのみならず、更に進んで利他度生の爲めに自ら民間に向つて念佛を勸進するものを出だせり。空也上人光勝は卽ち其人なり。

空也は其出生を知らず。空也は其出生を知らず、或は醍醐天皇の皇子なりともいひ、或は仁明天皇の御子常康親王の御子なりとも傳へらる。壯年より好んで諸國の名山靈地を巡歷し道路を修め、橋梁を架し、井を掘り廢寺を興す等其爲すところ頗る行基に類せり。朱雀天皇の天慶元年空也歲三十七、これより以後は多く京都の市中に住し、自ら市街を巡遊し、念佛を稱へ、又人をして念佛を唱へしめき。其方法として市民を集めて相共に念佛を唱へつゝ鉦を擊ち瓢を敲き、時に自ら踊躍す、其狀宛然狂人の如くなりき。蓋しこは全く精神上の歡喜の發露にして所謂歡喜踊躍の狀を表示せしなるべし。されば時人呼んで市聖又は彌陀聖と稱せり。空也念佛は實にこれに始れり。これより念佛は專ら通俗的實際的信仰となり、殊に庶民階級

の間に於て汎く歸仰を博するに至れり。

空也に次で擧ぐべきは慧心僧都源信なり。源信は卜氏、天慶五年大和國當麻に生る、天資敏悟、十歳にして比叡山に登り、慈慧僧正の門に入りて出家し、天台止觀、四種三昧等一として修學せざるなし、天暦十年六月、十五歳にして勅を奉じて八講の講師となり、宮中に法華を講じ、布帛を賞賜せられ、僧都に補せられたり。既にして世榮を避け、交衆を絶ちて横川に蟄居し、一人一切經の披閲に努め、閲讀前後五回に及び、偏に出離の要道を求めたりしが、後深く淨土敎に歸して、盛んに念佛を修せり。其著往生要集、觀心略要集、正修觀記、白骨觀等に說くところは悉く厭穢欣淨にして痛切に穢土可厭の理淨土可愛の相を讃せり。

就中往生要集は淨土敎の要領を擧げたるものにして後に出でたる良忍〔擧應大師〕永觀、叡空等を驅りて淨土敎に歸せしめしのみならず、遂に法然上人をして淨土宗を開立せしむるに至れり。「我往生要集の先導によりて念佛門に入る」云々〔淨土隨聞記〕とは實に上人の告白にして、如何に源信が上人に取りて有力なる指導者たりしかを察すべし。

蓋し源信は從來の念佛思想より更に一歩を進め、具體的に彌陀佛及び淨土を確認してこれを觀法の對象とする所謂觀念念佛を主張せり。往生要集の所謂正修念佛即ち是なり。而して此觀念の念佛に堪へ得ざるものゝ爲めには稱念口稱の念佛を說きこれに依りても均しく往生の得果あるべきことを勸めたるなり。

これ啻に僧都一生の思想の變遷として注意すべきのみならず、實に我國念佛思想史上の重要なる變遷を語るものにして大師に依りて主唱せられたる念佛の法が社會的變遷とこれに伴ふ宗敎的要請の變轉に依りて次第に轉化し遂に法然上人に至りて純なる易行口稱の念佛に至りし道程を暗示せるものなり。

尙ほ源信の後、天台より出でゝ融通念佛の一宗を開立せしものに良忍上人あり、上人は藤原氏尾張國知多郡富田村の人なり。後三條天皇の延久四年正月六日を以て生る。年甫めて十三、比叡山に學びて顯密の奥義を極め

しも、深く感ずるところあり、遂に意を決して大原に隱れ苦心修行したる後、融通念佛の法を開き、聲明の業を興し或は市中に出で或は諸國を遊化して弘布勸進に力めたりしかば、これに歸依するもの多かりき。斯くて崇德天皇の天承二年二月一日、六十一歲を以て入寂せり。天台の一隅に寓せる念佛は諸大德の奮起に依りて漸く宗敎の面目を發揮し、一宗派を開くに至れり。これ從來の宗敎が貴族的形式的となりて、人心を救濟するの權威を失ひしと朝に夕を測り難き社會上の大變革が此易行易修の未來敎に讃仰し共鳴するに至らしめたる結果、著しき實蹟を擧げ得たりしが如し。

二　法然上人に及ぼせる大師の影響

法然上人は漆間氏、名は源空、法然は其房號なり。崇德天皇長承二年四月七日、美作國久米南條稻岡莊に生る、保延七年、年甫めて九歲にして父時國難に遭ひしが、上人は其遺言に依りて同國菩提寺觀覺の室に入り、內外の典籍を稽古したりき。かくて居ること五年、天養二年十三歲の時、比叡山に登りて西塔北谷持寶房源光の室に入り、次いで久安三年十月、十五歲にして剃髮し戒壇院に於て圓頓戒を受け間もなく師源光の薦めに依りて功德院の肥後阿闍梨皇圓に師事して三大部を修學したりき、同六年九月十二日（十八歲）皇圓の座下を辭して、黑谷に隱れ、叡空の室に投じて、靜に出離の要道を求め、後諸宗の碩學を歷訪して信仰を敲き、再び黑谷の報恩藏に入りて一代の聖敎を披閱し次に得るところあり、就中上人が特に精讀探究せしは往生要集なりき。上人此書を熟讀すること數回、心中の疑團尙ほ氷解するに及ばざりしが、一たび善導の觀無量壽經疏を披くに至りて、立ちどころに聖道難行を捨てゝ淨土の易行に入るの大決心をなし專修念佛の一行に歸して淨土宗を開立せり。これ實に承安五年春三月（年四十三）の事なり。是に於て西山廣谷に住し、次いで東山吉水に、加茂の河原屋に、白河禪房等に轉寓して盛んに敎法宣布に努め、建久九年選擇本願念佛集の撰述あり。これより朝野の崇仰一身に集まりしと共に反抗迫害を蒙ることゝなりしも、比叡山は上人が初め其敎を受けたるところにして、所唱の念佛は實に大師及び慧心の遺緒を繼承恢弘するにありしといふも敢へて過言にあらず。されば上人

は大師の後慈覺長意、延昌、尋禪、源心、禪仁、良忍、空と次第相承せし圓頓戒の正統を繼ぎ、第十代の嫡統に當れり。蓋し戒法護持は佛敎の通規にして廢棄すべきにあらず、上人は一向專修の念佛宣傳者たりしも常に自らこれを嚴持して身を修めしのみならず。請ふものあれば授戒して其護持を勸說せり。元久元年十一月の七箇條起請文の第四條に於て、上人は「念佛門に戒行なしと號して、專ら婬酒食肉を勸め適律義を守る者を雜行人と名づけ、彌陀の本願を憑む者は造惡を恐るゝ忽れと說くを停止すべき事」と說き、更に「右戒は是佛法の大地なり。衆行區なりと雖も、同じく之を專らにす是を以て善導和尙は目を擧げて女人を見ず。此の行狀の趣、本律の制に過ぎたり、淨業の類之に順せざる者は總じては如來の遺敎を失し、別しては祖師の舊跡に背く旁據無きものか」といひて、彌陀の本願を憑むものも尙ほ戒法を持ち得るものは保ちて婬酒食肉を愼むべきことを誡めたり、されば上人は一向專念の信仰よりは持戒破戒も敢へて問ふところにあらずと說きつゝも、尙ほ好んで惡をなし、罪を犯すべきにあらず。善人となり得るものは努めて善をなしつゝ念佛すべしと勸め、殊に出家は持戒持律して如法の生活をなすべしと主張せり。

要するに僧風頽廢の弊を慨き、蹶起して宗敎改革の烽火を擧げたる上人は、大師の先蹤に倣ひて其方策を踏襲せしものなるべく、しかも其結末に於て相異る所あるは主として時代の趨勢を異にするに依るのみ。上人が初めに持戒持律に憑らんとしつつも後に彌陀本願の專修念佛の一行に歸し時に戒法をも捨てんとするが如き口吻を漏しゝは、亦時代の要求に依る思想發展の過程にして上人が親鸞上人の取りしが如き無戒主義を唱へず、自ら持することの極めて嚴なりしに拘らず、他を待つに稍寬なりしが如き、圓滿なる上人の人格を遺憾なく表現せるもの、過渡期の改革者としては免れ難きところなるべし。

三　親鸞上人に及ぼせる大師の影響

天台宗より出でて、法然上人の敎に歸依したるものに、又信空隆寛辨長聖覺親鸞等あり。西山の證空も亦河內の磯長に於て日野の願蓮より天台法

文を傳へしといふ(淨土源流章)。吾人は今これらの上人門下の中特に親鸞上人につきて大師の影響を說かん。

本願寺覺如の親鸞傳繪(永仁三年撰)に「九歲の春のころ、阿伯從三位範綱卿(于時從四位上、前若狹守後白河の上皇の近臣なり、上人の養父)前大僧正(慈圓、慈鎭和尙是也、法性寺殿御息月輪殿長兄)の貴坊へ相具奉て、鬢髮を剃除し給き、範宴少納言公と號す、自爾以來しば〳〵南岳天台の玄風を訪て、ひろく三觀佛乘の理を達し、とこしなへに楞嚴橫川の餘流を湛て、ふかく四敎圓融の義にあきらかなり」と見ゆるが如く、上人は剃髮後二十年比叡山上に於て天台の法門に親み二十九歲(建仁元年)隱遁の志動きて山を下れり。これ上人の宗敎的要求の熾烈なる、山上の生活に慊焉たるものありしとはいへ、其修學時代二十年間に得たりし學識はやがて宗敎的に復活したりしなり、元仁元年淨土眞宗開立の本書たる顯淨土眞實敎行信證文類を著し、弘長二年十一月二十八日示寂す。歲九十なり。上人の常陸に於て敎行信證文類を撰述するや、其方便化身土文類六に於て大師の末法燈明記の殆ど全文を引用して「披閱末法燈明記(最澄制作)」と標示せり。これ上人が「穢惡濁世群生、不知末代旨際、毀僧尼威儀、今時道俗思量己分」との自釋を證明せんが爲めにして、既に支那の道綽の安樂集を引きたりしも、更に剴切ならしめんが爲め、大師の文に及び、末代濁世に於ては正法の時代像法の時代と異れる獨得の機敎相應あることを明かにし、宗敎的自覺を喚起せんとしたりしもの、存覺の六要鈔に「引用意者、此記之意、能修之機、所學之敎、機敎相順可獲益故、具明末世五濁衆生、無戒放逸、修行難立、故引相勸淨敎修行、遍欲令知一稱佛名、一生信者、所作功德、終不虛也」といへるはよく其意を盡くせり。上人は又其淨土和讃の中現世利益和讃の初めに大師の事を歎じて、

阿彌陀如來來化シテ　息災延命ノタメニトテ
金光明ノ壽量品　トキオキタマヘルミノリナリ。
山家ノ傳敎大師ハ　國土人民ヲアハレミテ
七難消滅ノ誦文ニハ　南無阿彌陀佛ヲトナフヘシ。

といひ、聖道門に說くところの鎭護國家の利益が、他力念佛の行者をも抱擁

することを示せり。金光明經は法華、經仁王經と合せて鎮護國家の三部經典と稱せらるゝもの、上人は此金光明經壽量品を以て彌陀如來の來化して說けるものなりとし、左訓に「コノジュリヤウホムハ、ミダノトキタマヘルナリ」といへり。要するに鎮護國家息災延命(壽量品)(彌陀)(上人の左訓にはシチナンヲトドメ、イノチヲノベタマフナリとせり)の法は無量なりと雖ども、普ねく國土人民に及ぼして道俗男女貴賤の間に均しく稱へらるゝ南無阿彌陀佛の名號にあらざれば、天下の七難(七難)を消滅せしむること能はざるを宣揚せるものなり。

又和讃にいふところの「七難消滅ノ誦文」とは七難消滅護國頌(坂本西教寺にて發見の古寫本あり、今傳教大師全集に收む)を指すが如し。原頌に只「修念佛」とあるを、上人は「南無阿彌陀佛を稱ふべし」となせりと說くものあれどもなほ、研究の餘地あるべし。

上人の門侶交名帳に「尋有、山、善法房僧都」と見えたる尋有は、上人の俗弟なりといへば、轉々上人と山門との關係深きことを思はしむ。爾後覺如存覺が天台の法文を受學せしのみならず、本願寺の歷代が青蓮院に於て得度するを例とするに徵するも、天台宗との親緣掩ふべくもあらず。

四　榮西禪師に及ぼせる大師の影響

榮西禪師は賀陽氏、備中國吉備津の人なり、字は明菴、葉上房と號す。永治元年四月二十日を以て生る。八歲の時より父に從ひて俱舍の頌を學び、十一歲にして郡の安養寺に入りて靜心に師事し、十四歲落髮して、延曆寺の戒壇に登り、こゝに始めて出家の素懷を遂げたりしが、不幸にして十七歲の時師靜心入寂せしかば、其遺命に依りて法兄千命に事へたり。十九歲の時比叡山に登り、有辨法師に從つて台敎を學び、尋で諸國を巡歷し、後比叡山に還りて密灌を顯意より受け、在山八年、專心研鑽に從へり。禪師は敎界の廓淸を期せんが爲め二十一歲にして早くも渡宋の志を抱き、仁安三年四月(二十八歲)商船に乘じて明州に着し、天台山に登り、居ること半歲餘、俊乘房重源に誘はれて歸朝せり、齎すところの天台新章疏三十餘部六十卷、悉くこれを比叡山の明雲座主に獻じたり。歸朝後禪師は大師の佛法相承血脈譜、智證大

師の教相異同、安然の教時諍論等を見て大に感ずる所あり。禪の蘊奥を究めんが爲め再び入宋し更に天竺に赴きて釋尊の靈蹟を巡禮せん事を望み、肥前國今津誓願寺にありて徐ろに渡航の機を待てり。文治三年四月(四十八歳)再び渡宋して宿昔の願を滿たす事を得たり。禪師は直に臨安府の行在に赴き知府按撫侍郎に謁して表を上り中印度に渡らん事を請ひしも、朝議これを許さゞりしかば、遂に去つて天台山に登り、萬年寺に於て黃龍八世の嫡孫虛菴敞禪師に參したり、これより建仁二年歸朝に及ぶまで約五年間親しく教を受け、其間又藏經を親閲して興禪要を究め、遂に僧伽梨の印信を授けられたり。」歸朝後の禪師は自ら興禪護國論第三、世人決疑門に「戒を以て初とし禪を以て究とす」といへるが如く、禪門の興隆に依りて當代の教界を刷新し、大師一生の志願たりし鎭護國家の大任を完了せんとするにありしが如し。然りと雖ども、山徒の反抗盛んにして其目的を達せず、去つて鎌倉に赴き將軍賴家及び政子の歸依を受け、建仁二年賴家の本願に依りて京都鴨川の邊に地を相し建仁寺を建立せり。寺内に眞言、止觀の二院の置かれて菩薩の大戒を行ふと共に又台密の行法をも行ふことゝなりしは、禪宗宣傳の先驅者としての禪師所唱の教義の然らしめしところならんも、山徒の鋭鋒を避けんとするの意に出でしならん。天龍寺供養山門嗷訴一件に寺が山門の末寺として建てられ天台の別院として設けられしと傳ふるは他に文獻の徵すべきものなしと雖も此間の消息を語るものといはざるべからず。出家大綱、興禪護國論、日本佛法中興願文等は即ち禪師の教界革正の意圖を表現せるものにして、日本佛法中興願文に「謂王法者佛法之主也、佛法者王法之寶也、是故慇懃可レ被二見知檢察一矣、近世以來比丘不レ順二佛法一、唯々能語之、學者不レ習二佛儀一、只形狀似レ之云々、小比丘榮西爲レ救二此陵遲一、亡二身命一、遊二兩朝一、學二如來戒藏一、持二菩薩戒律一、先勸二門徒一」といへるが如き其一端を窺ふに足るべし。而して此意圖の根抵に横る論據は大師に依りて宣傳せられたる禪の復興なり。建久六年山徒の嗷訴に依りて、朝廷の禪師に尋ねられしに答へて禪師は「我禪門者、非二特今始有一之、昔叡山傳教大師嘗作二內證佛法相承血脈一卷一、其初乃我達磨西來之禪法也(中略)禪宗若非傳教亦非、傳教若非台教不立、台教不立、

台徒豈拒、我乎、甚矣、其徒之闇其祖意也」といひて其先蹤を大師に求め、更に興禪護國論には「傳教大師譜文云謹案某度緣云、師主左京大安寺傳燈法師位行表文其祖璿和上自大唐持來寫傳達磨大師法門在比叡山藏、延曆末向大唐國請益、更受達磨大師付法、大唐貞元廿季十月十三日、天台山禪林寺僧翛然傳授天竺大唐二國付法血脉幷達磨大師付法牛頭山法門等頂戴持來安叡山文其後今及四百季也、榮西慨此宗絕、且憑後五百歳之誡說、欲興廢繼絕也」といひて大師に依りて傳へられたる禪法の再興にして禪師の獨創にあらざることを辯せり。

興禪護國論は建久九年、禪師五十八歳の時畢生の心血を注げる名著なり。即ち先づ其序に於て佛教の至極は禪宗にあることを論じ、次に十門を立てゝこれを論證し、令法久住、鎮護國家を極力高潮したるものなり、即ち第二鎮護國家門には、仁王經を引きたる後、其般若者禪宗也、謂境內若有持戒人、則諸天守護其國（中略）禪院恒修、此、是白傘蓋法也鎮護國家之儀明矣、智證大師表云慈覺大師在唐之日、發願曰、吾遙涉蒼波遠求自法、儻得歸本朝必建立禪院、其意專爲護國家利衆生之故云云、愚亦欲弘者、蓋是從其聖行也、仍立鎮護國家門矣（中略）何況禪宗諸教極理、佛法總府別立一宗と說きて、禪法は佛教の總府、釋迦教說の極理なりといひ、此禪法を修することは即ち鎮護國家唯一最良の方便なりと主張せり。

舊宗の勢力尙ほ旺盛なる時代に於て禪宗を傳へこれを我國上下に宣傳せんとしたる禪師が、次に出でたる道元禪師と全く異れる妥協的態度に出で祈禱を事とせるが如きは、改革の先驅者として又已むを得ざるところなりしのみならず、これやがて禪宗をして上下の歸仰を博し、動すべからざる基礎を築ける大動力たりしなるべし。

最後に吾人は禪師の高足たる道元禪師も亦其初めは比叡山に學び、菩薩戒を受けて後入宋求法し、新に曹洞禪を傳へて日本曹洞派の祖と仰がれしものなることを附加せざるべからず。

五　日蓮上人に及ぼせる大師の影響

日蓮上人は貫名氏、承久四年二月十五日、安房國小湊に生れたり。十三歳

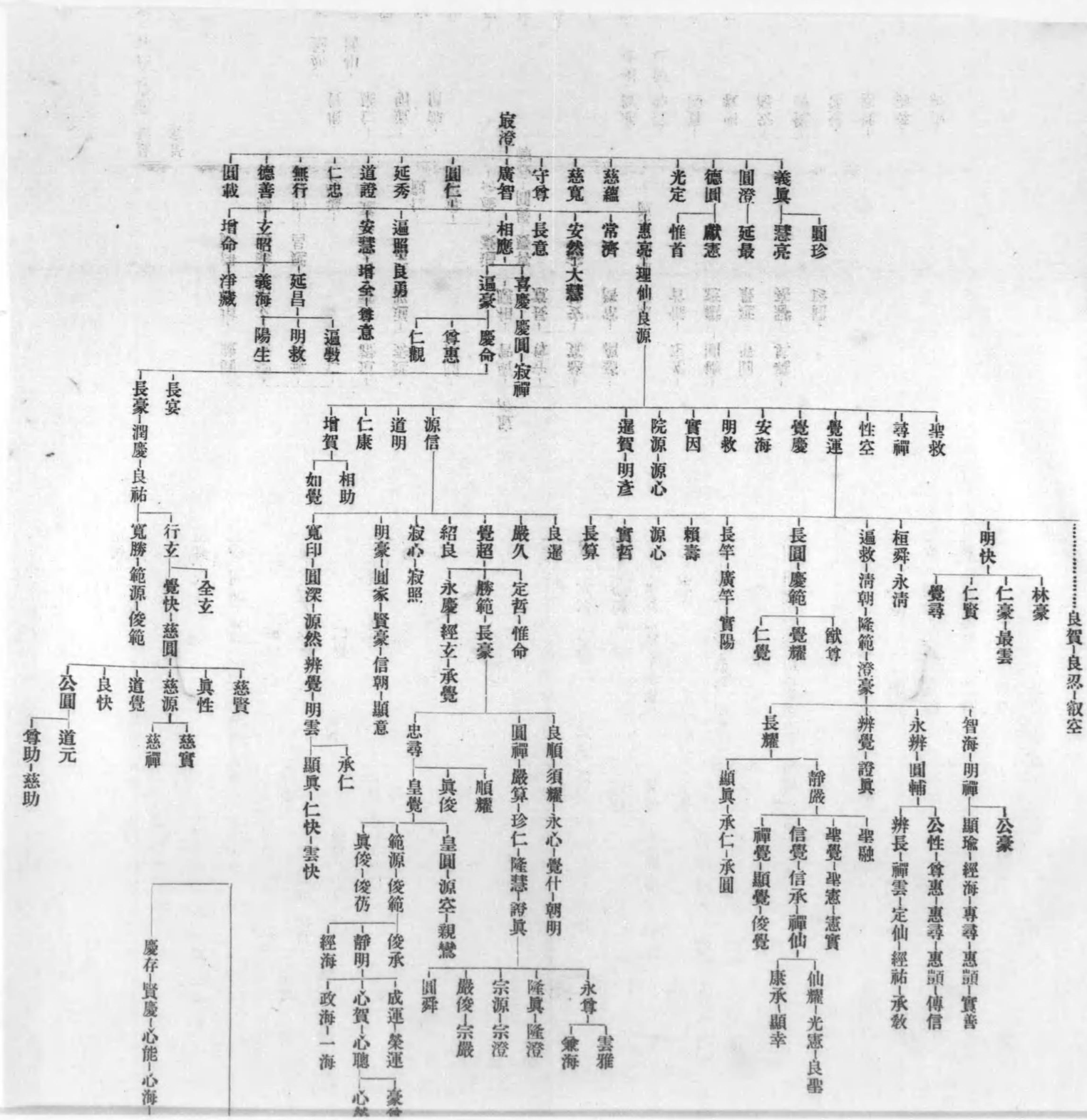
にして小湊の北なる清澄山に登りて修學し、十六歳の時出家して名を蓮長といふ。修學の進むに從ひて信仰の歸趣に苦しみ、當時東國文化の中心にして佛教も亦隆盛なりし鎌倉に出で新興宗教たる淨土、禪に依らんとして果さず、二十一歳の時去つて當時佛教の首都たりし比叡山に登り、研鑽習熟大に努め、或は三井寺に遊びて高僧に問ひ或は高野山を訪ねて碩學に質し、道を求むること十餘年に及びしが、最後に大師の主張たりし法華一乘こそ眞佛教にして他は悉く權化方便教たるの確信を得、而かも法華經を中心とする佛教の修行は南無妙法蓮華經なる題目を唱ふるにありとなせり。臥雲日件錄(寶德四年正月十四日條)に竹香西堂なるものの佐渡にありし日、法華宗の學僧より聞ける上人の開宗の由來を載せて、上人は初め天台宗を學び師に就きて清水邊に居りしに、一日自ら「吾乃法華上行菩薩也、今當後五百歳遠傳妙道之任」云々と叫びし爲め、狂人と看做されしといへるは一說に備ふべきなり。上人は大師の正法稍過ぎ已つて、末法太だ近きにあり、法華一乘の機今正しく是れこの時なり(守護國界章)の文を見て、末法濁亂の世に於ては唯釋尊說法の精髓たる法華一乘教に依りてのみ救濟せらるべきものなりとなし、無間天魔の語を以て盛んに析狀し頻々として發生せる天變地異は上下の社會が法華經の正義を捨てゝ邪教に歸するよりする天の制裁なればこれを救ふの道は國民擧つて法華經に歸するにありと唱へ、若しこれを實行せざれば更に大なる內憂外患相次ぎて臻るべしと高調し、遂に立正安國論、災難對治抄等を撰述せり。然るに其論鋒鋭利にして其言辭矯激なりしかば、反對者の忿怒を激成して、一身屢危らんとせしが上人は敢て屈せず、一難は一難より其勇を加へ、殊に蒙古襲來に對する豫言の的中せるを見て、一層其信念を强からしめたり。既にして上人は身延山に隱れて靜に後生を送ると共に後來自己の主張を繼承すべき門弟の養成と述作とに全力を注ぎ、徐に自己の主張完成の劃策に努めたり。弘安五年十月十三日示寂す、歳六十一。

上人以爲らく「日蓮は日本第一の法華經の行者なり(中略)日蓮と名乘ること自解佛乘とも言ふべし(中略)經に云く日月の光明の能く諸の幽冥を際く

が如く、斯の人世間に行じて能く衆生の闇を滅すと、此の文能く能く案じさせ給へ。斯人行世間の五字に、上行菩薩、末法の始の五百年に出現して南無妙法蓮華經の五字の光明をさし出して無明煩惱の闇を照すべしと言ふ事也。日蓮この上行菩薩の御使として日本國の一切衆生に法華經を受け持ちて勸めしは是れ也」(寂日房御書)と、蓋し上人は法華經の行者として、法華一乘の敎旨を大師の昔に復さんとせるもの、大師の眞意は唯法華一乘敎にありとして極力眞言禪戒を排擊し、慈覺智證兩大師の密敎化を斥けて獅子身中の蟲なりと嘲り、上人自ら「根本大師門人日蓮」(法華題目抄)若しくは「末法法華一乘行者法華宗沙門日蓮」(內證佛法血脈)と署名し、又自己の使命を宣言したる開目抄には「日本に佛法渡りてすでに七百餘年、但だ傳敎大師一人ばかり法華經を讀り」といひ、更に「日本國に此法顯はるゝ事二度なり。傳敎大師と日蓮なりと知れ」と語りて大師の眞門弟を以て自ら居れるなり。其勇戰奮鬪の如きも、もとより上人の多血的性格の然らしめしところなるも、亦大師の後半生の生活に學ぶこと多かりしならん。撰時抄に「此等は傳敎大師の自讃にはあらず。去る延曆二十三年正月十九日、高雄山に桓武天皇行幸なりて六宗七大寺の碩學(中略)十有餘人最澄法師と召し合せられて宗論ありしに、或は一言に舌を卷きて、三言二言に及ばず皆一同に頭をかたぶけ、手をあざり(中略)十大德の慢の幢も倒れにき、爾時天子大に驚かせ給ひて、同二十九日に弘世、國道の兩吏を勅使として重ねて七寺六宗に仰せ下されしかば、各々歸依の狀を載せて曰く、中略彼の漢土の嘉祥は一百餘人を集めて天台大師を聖人と定めたり。今日本の七大寺二百餘人は傳敎大師を聖人と號し奉る、佛滅後二千餘年に及んで兩國に出現せり」云々といひ、又「日本國の七寺三百餘人が云く、最澄法師は大天が蘇生か、鐵腹か、再誕か等云々。而りといへども、天も罰せず、還て左右を守護し地もわれず、金剛の如し。傳敎大師は叡山を立てゝ一切衆生の眼目となる。結局七大寺は落ちて弟子となり、諸國は檀那となる(中略)大師云く天台法華宗の諸宗に勝れたるは所宗の經に依るが故なり、自讃毀他ならず」云々といへるは大師の天台の弘通及び他宗の析伏に對する偉績を讃歎せるものなり。而して如說修行抄に「我等

が本師釋迦如來は在世八年の間析伏し給ひ、天台大師は三十餘年、傳敎大師は二十餘年、今日蓮も二十餘年の間權理を破す。其間の大難數を知らず。佛の九横の難も及ぶか及ばざるは知らず。恐らくは天台傳敎も法華經の故に日蓮が如く大難に値ひ給ひし事なし(中略)是等の大敎には龍樹、天台、傳敎もいかでか及び給ふべき。されば如說修行の法華經の行者には三類の强敵打ち定まりてあるべしと知り給へ、されば釋尊御入滅の後二千餘年が間如說修行の行者は、「釋尊天台傳敎はさてをき候ひぬ、末法に入りては日蓮幷に弟子檀那等是れなり」と見ゆるが如く、上人が自己の奮鬪的生活を說くに當りて必ず天台、傳敎兩大師の事に言及し、自己の厄難は像法時代の二師と異り末法の世に出でたる正法の宣傳者としては寧ろ二師以上なりといふに至りて、何人も上人自ら任ずることの大なるを認めざる能はず。

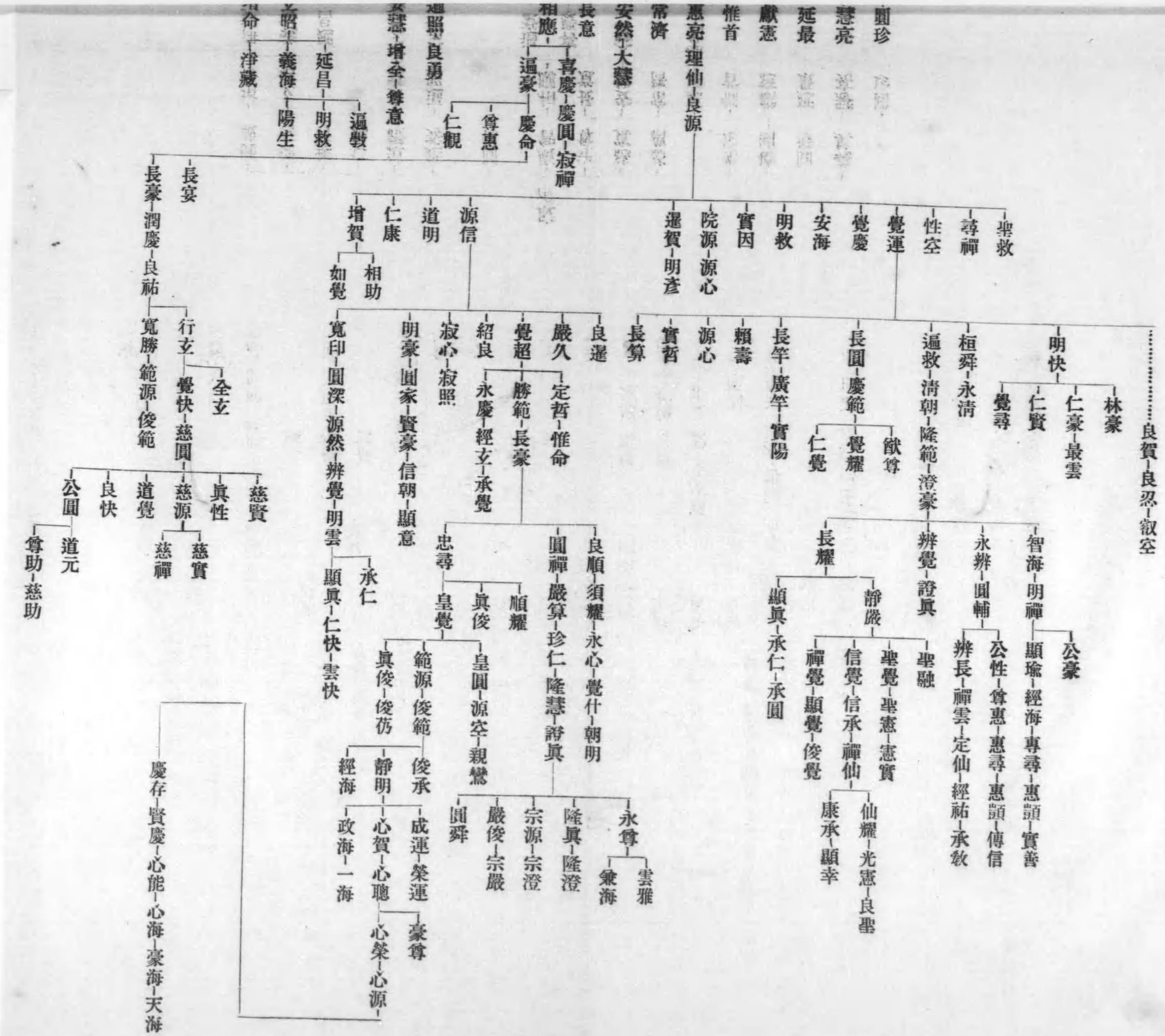
大師の後代に及ぼせる感化の偉大なる、もとよりこれに止まれるにあらずと雖ども、吾人は今これを羅縷するに遑あらず。其系統はこれを法脈圖に讓りて省略に從ふ。(法脈圖)

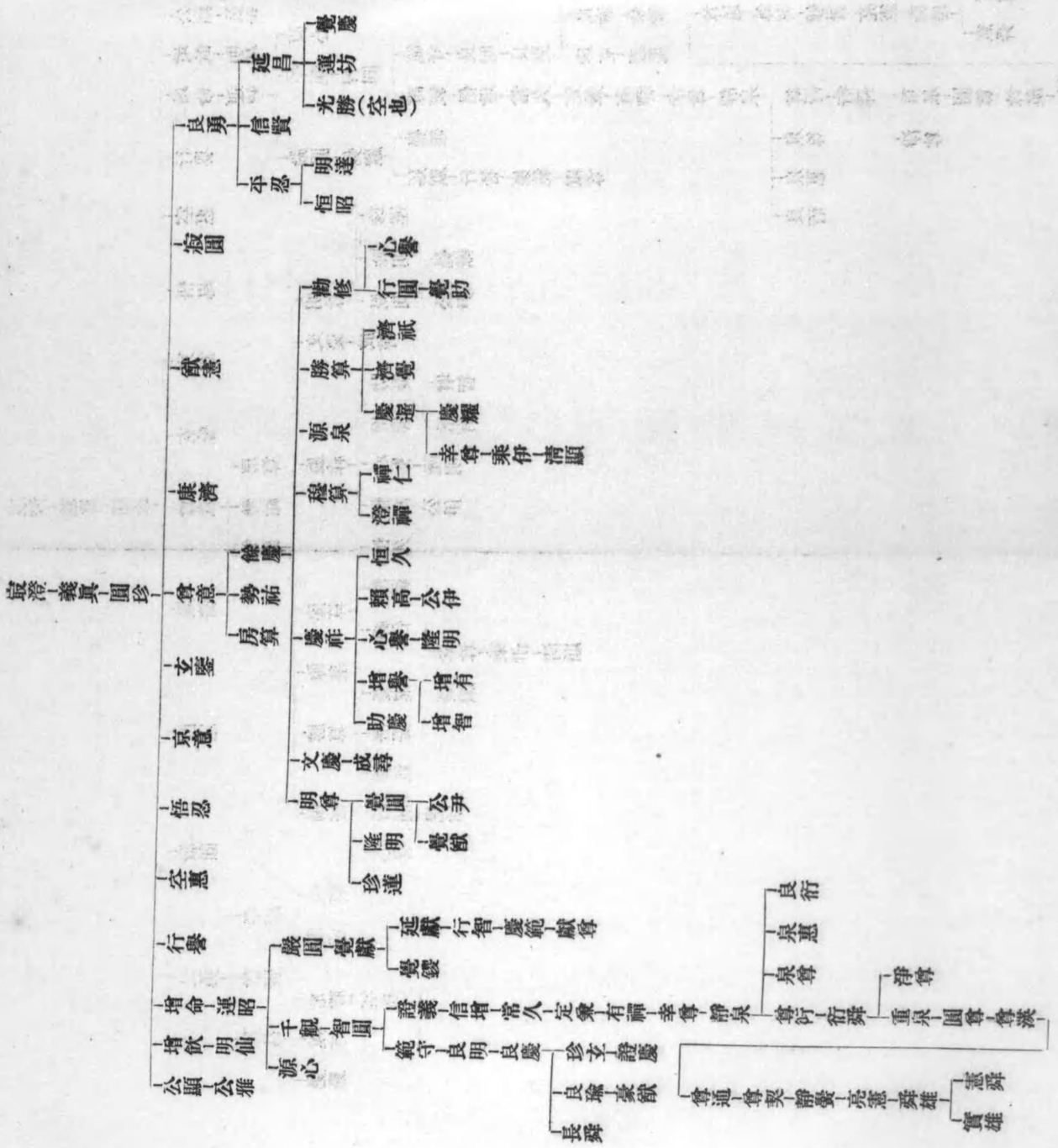


間如說修行の行者は、釋尊天台傳敎はさてをき候ひぬ、末法に入りては幷に弟子檀那等是れなり」と見ゆるが如く、上人が自己の奮闘的生活を に當りて必ず天台、傳敎兩大師の事に言及し、自己の厄難は像法時代の と異り末法の世に出でたる正法の宣傳者としては寧ろ二師以上なり ふに至りて、何人も上人自ら任ずることの大なるを認めざる能はず。 大師の後代に及ぼせる感化の偉大なる、もとよりこれに止まれるに ずと雖ども、吾人は今これを羅縷するに遑あらず。其系統はこれを法 に讓りて省略に從ふ。(法脈圖)

間如說修行の行者は、釋尊天台傳敎はさてをき候ひぬ、末法に入りては日蓮幷に弟子檀那等是れなり」と見ゆるが如く、上人が自己の奮鬪的生活を說くに當りて必ず天台、傳敎兩大師の事に言及し、自己の厄難は像法時代の二師と異り末法の世に出でたる正法の宣傳者としては寧ろ二師以上なりといふに至りて、何人も上人自ら任ずることの大なるを認めざる能はず。

大師の後代に及ぼせる感化の偉大なる、もとよりこれに止まれるにあらずと雖ども、吾人は今これを羅縷するに遑あらず。其系統はこれを法脈圖に讓りて省略に從ふ。（法脈圖）




最澄
義真
圓珍
公顯
公雅
增欽
明仙
增命
運昭
行譽
空惠
悟忍
京意
玄鑒
尊意
康濟
猷憲
寂圓
良勇
信賢
延昌
蓮坊
慶
光勝(空也)
平忍
明達
恒昭
源心
千觀
智圓
厳圓
覚猷
延猷
行智
慶範
猷尊
覚鍛
證義
信增
常久
定兼
有禅
幸尊
静泉
範守
良明
良慶
珍玄
證慶
良瑜
蒙猷
長舜
尊通
尊契
静叡
亮憲
舜雄
憲舜
實雄
尊叶
衍舜
良衍
泉恵
泉尊
重泉
圓尊
尊渋
淨尊
源泉
勝算
清覚
清祇
慶運
慶耀
幸尊
乗伊
清顕
穏算
禅仁
澄禅
勧修
行圓
覚助
心覚
慶祚
心覚
隆明
恒久
頼高
公伊
増覚
増有
助慶
増智
文慶
成尋
明尊
覚圓
公尹
隆明
覚猷
珍運
餘慶
勢祐
房算

大正十年三月十　日印刷
大正十年三月十五日發行

編纂者　滋賀縣滋賀郡坂本村延暦寺內　御遠忌事務局
發行者

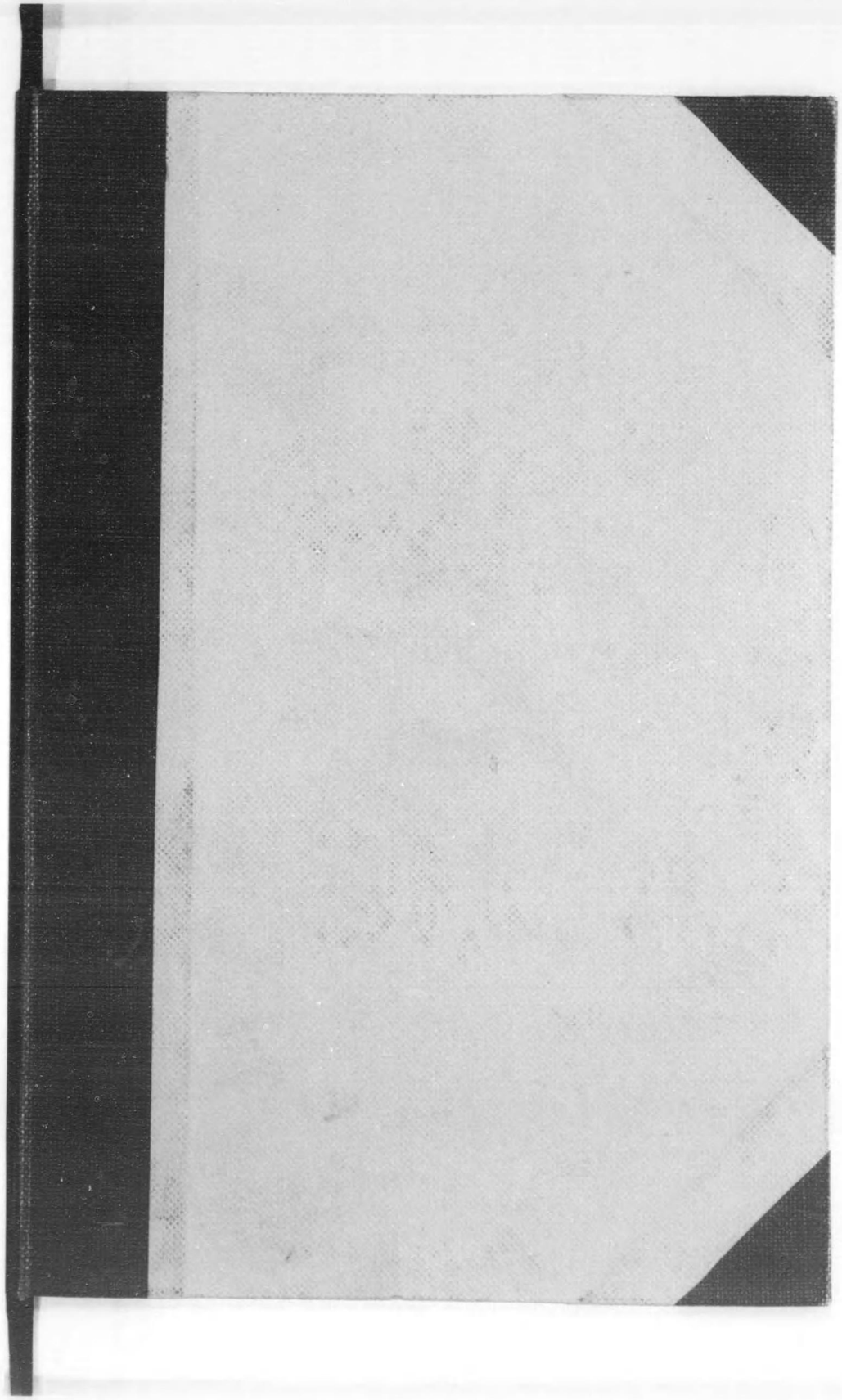
右代表者　京都市木津屋橋堀川東入　長澤德玄

印刷者　京都市木津屋橋堀川東入　井出時秀

印刷者　京都市木津屋橋堀川東入　六條活版製造所

發行所　滋賀縣比叡山坂本村延暦寺　御遠忌事務局

不許複製

I 1000.

終